

令和元年度第2回北海道立旭川美術館協議会 議事録

★旭川美術館協議会は、学識経験者、学校教育及び社会教育の関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者、公募の委員で構成され、毎年度2回（通常は7月と2月）開催されます。美術館の活動について、館長に意見を述べることができる諮問機関です。委員の過半数の出席で成立します。

- 1 日 時 令和2年2月19日（水） 14:00～16:00
- 2 会 場 北海道立旭川美術館講堂
- 3 出席者数 協議会委員12名中10名出席 美術館職員7名（館長および正規職員）
- 4 出席委員 秋葉美香、大石朋生（副会長）、小野田倫久、佐藤 圭、佐藤 保（会長）、土田拓美、新居由紀子、星 秀隆、舛田諭希、山本 進（50音順敬称略）
- 5 議 事 (1) 令和元年度（2019年度）事業実施状況について
(2) 令和2年度（2020年度）事業運営計画について
(3) その他（「外国人観覧者の状況」について）

◎議事録（抄）

議事に入る前に、委員紹介、館長挨拶を行い、その後、第1展示室「七彩の美」展及び第2展示室「イロイロな木」展を観覧。

観覧後、会長の司会進行により議事に入る。

<議事についての意見等>

- * 事務局より令和元年度の展覧会等の実施状況（美術館評価含む）、令和2年度の事業予定等を説明（展覧会、教育普及活動については映像でも紹介）。事務局からの説明に対する意見や、美術館の役割に期待することや、今後このような取組をして欲しいというようなことについて意見や協議会委員を通しての感想等を頂く。
- 教育普及プログラムに参加し、学校の子どもたちや先生方と一緒に鑑賞することで、美術作品を通じて人間関係が高まった。美術館は作品以外でも、人と人と交流する場として大事な場所である。
- 地方からはなかなか難しいが、学校から子どもたちが美術館に来て鑑賞するということは大切なこと。また、子どもだけではなく、大人にとっても大切であり、それが文化の向上につながっていく。
- 写真展を開催すると、絵画や版画とはまた違った客層となり、いろいろな方に美術館に興味を

持ってもらふことにつながるのではないか。また、近年アイヌ文化が注目されているが、アイヌの作家を集めた展覧会を行うことができればおもしろいと思う。

- 近年は、ボランティア活動をする方も少なくなり、また、現メンバーの高齢化により、売店や喫茶コーナーの運営も厳しい状況となってきている。
- 来年度に京都国立近代美術館の巡回展があるが、このようなことをもっと国全体で行い、首都圏と地方の文化的な差異の解消につなげてほしい。
- アイヌ民族の民芸品などは、資料館にはあるが、美術館にはあまりないのではないか。美術館にでいくつか所蔵するということではできないだろうか。
- 作品の解説パネルに、何歳の時の作品であるかとの記載があればわかりやすい。そのようにできたら、何歳の頃に抽象的な作品になったなどの見方もでき、おもしろいと思う。
- 歴史と文化を一緒に見せていく形はすごく大切なこと。昔から現在に至るまでの作品をそろえ、それと付随させて、地域・旭川・子どもたちはどう変わったかなどを並行させて見せていくことは大事だと思う。
- 去年の「ブリティッシュ・オートマタ展」は評判が良く、体験型の学習が重要視される中、いじれる、触れるなどの、体験型の展示は重要なことだと感じた。また、首都圏から地方へ来た人にとって、地方の文化は新鮮なもの。全国の人が旭川を知るために、地元の作品や作家を見る場合もある。そのようなことを考えた展示を考えていく必要がある。